

研究会・部会・ 委員会・分科会	活動ビジョン・ゴール	年度目標	進捗・課題	予定・行動計画	関連団体等
食品安全研究会					
食品微生物研究部会	<p>食品産業会が抱える食品微生物関連の共通課題を、部会員が協同で(企業の枠を超えて)研究し解決を目指す。</p> <p>食品関連企業の微生物担当者が業務上の悩みや課題を相談・共有し相互解決できる場として機能する。</p> <p>当部会の研究成果を含む食品微生物に関する安全性等の情報について、広く周知活動を行う。</p>	<p>部会員が集まり定期的に交流や情報交換を行える場としての部会運営の再整備(アフターコロナ対応としての集まる場の整備)</p> <p>新規研究PJの立案および他機関との積極的な連携の実施</p>	<p>【全体】</p> <p>11月27日(水)13:00~17:00に、江東区森下文化センター第2研修室とZoomとのハイブリッドにて、勉強会および部会を開催。部会員36名が参加。主要な内容は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・公益社団法人大分県薬剤師会 検査センター微生物顧問 緒方喜久代先生をお招きし「微生物試験における精度管理」との演題でのご講演をいただいた。部会の主要課題のひとつである精度管理に関する理解を深めた。</li> <li>・分科会報告を実施。芽胞菌分科会より定期議論のレビュー、チルド勉強会より後述の発表内容および会場からのご意見についての報告、国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会より活動レビューと今後の活動案の提示があった。</li> <li>・部会内でのディスカッションを実施。4つの議題についてそれぞれテ</li> </ul>		

			<p>ーブルを設け、意見交換を実施した。</p> <p>【分科会活動】</p> <p>(1) 芽胞菌研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 活動無し。</li> </ul> <p>(2) チルド勉強会</p> <p>a. ボツリヌス菌接種試験活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 活動なし (追加試験について日本缶詰びん詰レトルト食品協会にて調整中)。</li> </ul> <p>b. 耐熱性試験法検証活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本缶詰びん詰レトルト食品協会第73回技術大会(11/19-20)にて、「芽胞の耐熱性測定における試験室間検証試験 ～<i>Bacillus cereus</i> 芽胞の耐熱性測定～」として口頭発表。</li> </ul> <p>(3) 国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今後の方針について議論 (12/17、オンライン)</li> </ul>		
食品リスク研究部会	食品の安全性評価の考え方を学び、その普及に努める。	<p>① 食品リスク研究に関する勉強会を3回以上開催し、情報発信する。</p> <p>② 「ナチュラルミステイク」の情</p>	<p>① 12月9日に第3回勉強会をハイブリッド開催した(会場:森下文化センター)。「食品安全に関する消費者意識の変遷ー今食品企業に求められることー」と題して、森田満樹先生(FOOCOM)にご講演いただいた(有料参加者24名)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 勉強会全体のフラッシュレポート(「イルシー」162号)</li> <li>・ 第2回勉強会の内容を手島玲子先生による書き下ろし原稿として投稿(「イルシー」162号)</li> </ul>	

		報発信。	② 同日、部会を開催し本年勉強会の振り返り、「イルシー」誌へのフラッシュレポートの内容・スケジュールを確認した。		
香料研究部会	食品香料の性質と安全性等に関し偏向の無い科学的な調査研究を行う。食品香料に関する正しい科学的共通理解を産・官・学に普及させる。	—	—	—	—
食品領域の動物実験代替推進プロジェクト (AAT プロジェクト)					
全体進捗	<p>&lt;活動目的&gt;</p> <p>1) 動物に依存しない、毒性発現機序に基づいた、ヒトへの予測性のより高い評価アプローチを確立し、食品の安全性および機能性評価の精緻化・効率化を進展させること。</p> <p>2) 動物福祉の世界的潮流の中で食品領域の取り組みを加速させること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究 WG テーマ推進による評価技術基盤並びに評価戦略構築とケースレポートの作成。</li> <li>情報収集・発信 (国際ワークショップ内容のレポートによる発信、シンポジウムの開催)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>12月25日 プロジェクト全体会議を開催 (外部会議室・森下文化センター &amp; Web 開催)。プロジェクト全体及び各 WG の進捗と今後の活動方針・計画を共有し、全体にて承認。2024年度の活動収支 (見込み) の報告並びに2025年度の活動予算と会費について説明。</li> <li>外部発表: 第37回日本動物実験代替法学会学術大会 (11/29~12/1、宇都宮) においてシンポジウム及び一般演題ポスターにてプロジェクト活動内容について発表。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>今後のプロジェクトの活動について、方向性、活動戦略、スケジュール等に関する議論を目的に、コアメンバー会議を開催予定 (2025年1月~3月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国立医薬品食品衛生研究所、独立行政法人 製品評価技術基盤機構 (NITE)、一般財団法人化学物質評価研究機構 (CERI)、その他アカデミア等の専門家</li> <li>関連学会 (日本動物実験代替法学会等)</li> <li>ヨーロッパ、アジア等の ILSI 支部</li> </ul>

体内暴露予測ワーキンググループ (WG)	食品成分の体内曝露を、動物を用いずに予測する手法の開発推進と現場実装	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 昭和薬科大学山崎研に構築した in silico 動態予測モデルの実装</li> <li>② 新規腸管吸収予測ツールの適用性把握</li> <li>③ ケースレポート対象化合物の体内曝露予測</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① in silico 体内動態予測モデルのガイドランス作成に向け、ケミカルスペースの簡易実行ファイル構築を進めた。</li> <li>② 来年の活動方針について議論し、体内動態予測モデルの検討内容の論文化を主要な取り組みとすることで合意。</li> <li>③代替法学会発表ポスター作成に協働。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食品成分の体内動態予測に関する来年度の活動計画の具体化。</li> </ul>	
データベース WG	食品成分の既存毒性情報(文献等)を収集、活用し、反復投与毒性を予測する手法、システムを開発中。独自に毒性情報を収集することも検討する。	有害性評価支援システム統合プラットフォーム (HESS) を用いた食品成分毒性試験データベース及び使用ガイドランスを含む毒性予測手法の AAT 参画メンバーへの公開	2023 年までに構築した食品成分の毒性試験データベース (176 種) の有用性検証を目的に Read-across の予測結果と原著論文を用いて POD やターゲット臓器の予測の妥当性検証を実施。合わせて 176 種のデータベースの公開をもって本 WG の活動を一旦完了とすることで合意済。データベースの HESS への登録や、論文データの商業利用・知財の課題について、2024 年より引き続き検討中。 <b>【11~12 月度進捗なし】</b>		
ケースレポート WG	NAMs (New Approach Methodologies) を用いた食品成分の安全性評価戦略を具体化させ、体内曝露予測 WG	第 1 弾のケーススタディは「肝障害」をテーマとする。評価スキームの検証は、in vitro では	WG 成果の発信、専門家・研究者とのディスカッション、プロジェクト活動への理解を目的とし、植物アルカロイドのリデリインおよびモノクロタリンを対象とした評価スキーム	今回の評価スキームの検証にて課題となったラットからヒト一連の評価について、新たな対象成分の選定と検証を、外部専門家と連携しながら進める。また、	

	とデータベース WG の活動と協力し、in vitro assay 系を加えたリスク評価戦略を作成し、ケースレポートとして発信する。	Bayesian BMD 解析にて算出した BMDL を、in vivo では肝障害のみられた用量における曝露濃度予測値をそれぞれ PoD とし、両者を比較することで妥当性を検証する。	の検証と、4種の医薬品（アミオダロン、バルプロ酸、ジドブジン、ネファゾドン）を用いた BMD 解析手法の妥当性検証について、第 37 回日本動物実験代替法学会（2024 年 11 月 29 日～12 月 1 日、演題番号：P079）にてポスター発表を行った。食品・化粧品分野等、産業界の多くの研究者から ILSI Japan AAT プロジェクトの取り組みに興味を持ってもらい、時間を超過した議論の場となった。また、代替法研究者は AAT プロジェクトとしての次の取り組み予定や、代替法での全身毒性に対する関心が高いことが窺われた。	ポスター発表した内容を、ケースレポートとして発信することを計画している。	
企画運営 WG （国際ワークショップ & シンポジウム WG より変更）	動物実験代替法における各国の技術・規制動向に関する情報を発信することにより、食品業界における代替法の開発や取り組みの推進を促す。	評価技術に関する情報を収集しプロジェクト内へ共有すると共に、プロジェクトの活動内容を学会やワークショップ等を通じて発信する。	食品の機能的評価における動物実験代替法の活用について、プロジェクトメンバーを対象とし、専門家の先生による講演会を企画している。第 3 回目は 2024 年 11 月 8 日（金）に、群馬大学の佐々木先生より「オルガノイドが紐解く腸内エコシステム」と題して講演いただいた。現地参加者、Web 聴講者を合わせておよそ 50 名の参加があり、大変盛況であった。第 4 回は東京大学の高橋裕先生にご講演いただくことが決定した。近く詳細を案内する予定である。また、食	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食品安全委員会による勉強会の開催。</li> <li>・東京大学高橋先生との講演内容打合せ。</li> </ul>	

			品安全委員会の頭金正博委員による勉強会を「食品安全委員会におけるNAMs への取組」と題して 2025 年 1 月 22 日（水）に開催する。		
研究会・部会・委員会・分科会	活動ビジョン・ゴール	年度目標	進捗・課題	予定・行動計画	関連団体等
バイオテクノロジー研究会	バイオテクノロジーを用いた持続可能な食料の安定供給への貢献を念頭に、バイオテクノロジーの重要性の理解を深め、バイオテクノロジー応用食品・作物・添加物等の安全性・活用に関する調査研究と情報提供を産・学・官連携及び国際的ネットワークを通して推進し、科学的根拠に基づく国際的に調和した安全性評価法や活用法の発展に貢献する。	<ol style="list-style-type: none"> <li>植物バイオテクノロジー報告書（旧 ERA プロジェクト調査報告）（年 4 回）</li> <li>バイオテクノロジー応用微生物を利用して発酵生産された食品・食品添加物等の安全性に関するワークショップ</li> <li>第 16 回 ISBR（International Society for Biosafety Research）2023 への安全性評価の専門家の派遣</li> <li>遺伝子組換えナタネの ERA に関する研究成果の</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>組換えナタネの環境リスク評価（ERA）に関する論文がアクセプトされた。</li> <li>植物バイオテクノロジー報告書 No. 68 号の発行、配布</li> <li>2024 年度第 4 回研究会を 12 月 16 日に開催。 <ul style="list-style-type: none"> <li>i. GM 作物関連 <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ GM Canola 論文の Update: 2025 年の計画として 8~9 月に ERA ワークショップを開催、当該論文とデータトランスポートビリティ（DT）をテーマにすることが共有された。</li> <li>✓ ベルギー・ゲントで 2025 年 11 月に開催される ISBR において、① DT、② 日本におけるスタック評価、③ ゲノム編集技術規制、④ 新規タンパク質評価の 4 つのセッションの企画を submit した。1 月初旬に accept されたか判明する予定。</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>植物バイオテクノロジー報告書 No. 69 号発行準備</li> <li>精密発酵の事例、各国の規制状況の調査</li> <li>第 17 回 ISBR2025 専門家派遣プロジェクトの準備開始</li> <li>石原産業が開発した「遺伝子組換え青色ファレノプシス Blue Gene」が機関誌「イルシー」に掲載予定</li> <li>データトランスポートビリティ（DT）に関するワークショップ開催</li> <li>2025 年度高度精製品ワークショップ開催</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>農林水産省</li> <li>消費者庁</li> <li>内閣府食品安全委員会</li> <li>環境省</li> <li>文部科学省</li> <li>経済産業省</li> <li>筑波大学環境系 &amp; つくば機能植物イノベーション研究センター（T-PIRC）</li> <li>明治大学農学部</li> <li>国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）作物研究部門</li> <li>横浜国立大学大学院環境情報研究院</li> <li>千葉大学大学院園芸学部</li> <li>東洋大学 生命科学部 生物資源学科</li> <li>東京大学大学院農学生命科学研究科 食の安全研究センター</li> </ul>

		論文発表	<p>ii. 11月開催の部会長会議について報告された。</p> <p>iii. 当日午後開催の[組換え微生物を用いて発酵生産された添加物・食品の安全性評価～発酵生産し、精製した特定の食品成分の安全性に関して～WS] に関し、参加者数など説明された。</p> <p>iv. 植物バイオテクノロジー報告書 No.69号原稿のレビュー</p> <p>2. 組換え微生物を用いて発酵生産された添加物・食品の安全性評価～発酵生産し、精製した特定の食品成分の安全性に関して～WS を開催。</p> <p>日時：2024年12月16日(月) 15:00～18:00</p> <p>場所：江東区文化センター第一・第二会議室(対面形式)</p> <p>参加人数：演者7名、聴講者67名</p> <p>プログラム</p> <p>15:00-15:10 本WSの意義 加村澄子 (ILSI Japan)</p> <p>15:10-15:30 フードテック(精密発酵)に関する国内外の規制動向 高橋無盡 (ILSI Japan)</p> <p>15:30-15:50 精密発酵のリスクコミ</p>		
--	--	------	---	--	--

			<p>ユニケーションを考える-遺伝子組換えやゲノム編集のケースを振り返って-</p> <p>佐々義子氏(くらしとバイオプラザ21 常務理事)</p> <p>16:15-17:50 総合討論</p> <p>児玉浩明先生 (千葉大学)</p> <p>中島春紫先生 (明治大学)</p> <p>山川隆先生 (東京大学)</p> <p>伊藤政博先生 (東洋大学)</p> <p>佐々義子氏 (くらしとバイオプラザ21)</p> <p>奥藤加奈子氏 (内閣府食品安全委員会事務局)</p> <p>佐藤健太氏 (消費者庁)</p> <p>高橋無盡 (ILSI Japan) (司会: 加村澄子)</p> <p>17:50-18:00 ワークショップのまとめと閉会の挨拶</p>		
--	--	--	--	--	--

栄養健康研究会

<p>栄養研究部会</p>	<p>「健康寿命延伸」はグローバルな持続可能な開発目標 SDGs の目標3「すべての人に健康と福祉を」に合致することから、「健康寿命延伸」をキーワードとした活動を継続</p>	<p>「健康長寿延伸」のための最新のエビデンスを継続して発信していく。</p> <p>●公開セミナー(有料)をZoomミーティングで1年に数回開催する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2025年の勉強会の企画および開催に向けた準備</li> <li>・ILSI Japan のホームページリニューアルに向けて、栄養研究部会の掲載内容を見直し、更新案作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2025年度第1回定例会議を2月14日(金) 明治イノベーションセンター(八王子)にて開催予定</li> <li>・2025年3月13日(木)に栄養プロファイルシステム(NPS)についての勉強会を開催予定(場所: 森下文化セン</li> </ul>	
---------------	---	--	---	--	--



	する。	●セミナー参加登録者に対しては、オンデマンド配信を実施する。		ター、講師：瀧本秀美先生、詳細決定次第、会員に案内予定)	
GR プロジェクト	食品・食事の血糖応答性の簡易評価法（GR法）の確立と普及	GR法の確立・発表論文発表 他施設研究を基礎とした測定系の安定化および簡易化を目標とする	低GI食品を含めた代表的な食品のGR値の測定ならびに測定の安定化を図るための詳細条件の検討を進めた。また、これまでの内容をまとめて、学会で発表をするための準備を進めた。	論文再投稿準備 GR法詳細条件の検討 GI値との比較検討	昭和女子大学 食健康科学部 健康デザイン学科 日本食品分析センター
茶類研究部会・茶情報分科会	茶樹に係わりその成分の世界的な多様さ、飲料その他商品に係わり各種茶成分の機能性、研究・開発・商品化等につき会員相互間の情報交換を深めると共に、外部からも情報を得る。	—	—	—	—

CHP (Center for Health Promotion)

Project PAN (Physical Activity and Nutrition) “身体活動と栄養”プロジェクト	超高齢化が進む国内において、働きざかりの人々や高齢者の健康維持を支援する、運動と栄養の複合プログラムの開発と実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヘルシーエイジングのためのプログラムの開発・普及</li> <li>・介護予防教室の開催(自治体、社会福祉協議会、企業)</li> <li>・地域リーダーの育成(大学、社会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京都墨田区委託事業 介護予防教室「すみだテイクテン教室」秋教室開催 すみだ共生社会推進センター (11/5, 11/12, 11/19, 11/26, 12/3, 12/10, 12/17) 八広地域プラザ (11/6, 11/13, 11/20, 11/27,</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・墨田区委託事業「すみだテイクテン」秋教室</li> <li>・津和野町シルバー人材センター主催リーダー養成講座</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>石巻専修大学</li> <li>鹿児島大学</li> <li>島根大学</li> <li>札幌医科大学</li> <li>東京都健康長寿医療センター研究所</li> <li>国立健康・栄養研究所</li> <li>国立健康長寿医療センタ</li> </ul>
---	--	---	---	--	--

		<p>福祉協議会、シルバー人材センター)</p> <p>・論文等、科学的成果の発信</p>	<p>12/4, 12/11, 12/18)</p> <p>・東京家政学院大学 2 年次栄養プロデュース実習 実習生 4 班 10 名受け入れ予定</p> <p>後半チーム (3 班 4 班)</p> <p>(12/5~12/18)</p> <p>・内閣府 戦略的イノベーション創造プログラム (SIP)</p> <p>第 3 期「包摂的コミュニティプラットフォームの構築」課題 D 「障がい者・高齢者の生きがい向上策」へ協力参加機関として参画</p>		<p>ー</p> <p>墨田区</p> <p>横浜市社会福祉協議会</p> <p>岩国市社会福祉協議会</p> <p>吉賀町社会福祉協議会</p> <p>津和野町シルバー人材センター</p> <p>益田市シルバー人材センター</p>
<p>Project DIET (Dietary Improvement and Education with TAKE 10!®)</p> <p>“途上国栄養改善と栄養教育”プロジェクト</p>	<p>途上国、新興国における官民連携の栄養改善の取組み「栄養改善事業推進プラットフォーム」(NJPPP) のプロジェクトとして、工場など職場の栄養改善プロジェクトを東南アジア各国で推進。</p>	<p>➤ フィリピン：「フィリピンの栄養強化米プロジェクト 2022 (調査研究)」2024 年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。</p>	<p>➤ 本年度プロジェクト実施せず</p>		<p>✓ Food and Nutrition Research Institute (FNRI：フィリピン食品栄養研究所)</p>
		<p>➤ ベトナム：「ベトナムにおける野菜の摂取行動に影響を与える要因調</p>	<p>➤ 本年度プロジェクト実施せず</p>		<p>✓ National Institute of Nutrition (ベトナム栄養研究所)</p>

		<p>査」ビジネスモデル構築、並びに 2024 年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。</p>			
		<p>➤ ミャンマー：「完全オンラインによるブロックチェーン技術を応用した職場における栄養教育」栄養教育推進に焦点を当てたビジネスモデル構築に向けた展開を計画。</p>	<p>➤ 本年度プロジェクト実施せず</p>		<p>National Institute of Nutrition</p>
		<p>➤ インドネシア：「インドネシアにおける健康的な食事の普及に関する調査 2022」ビジネスモデル構築、並びに 2024 年パリ栄養サミット</p>	<p>➤ 本年度プロジェクト実施せず</p>		<p>✓ ボゴール農科大学 (現 IPB Univ.)</p>

		に向けプロジェクトの総括を実施。			
CHP 全体	日本の産・官・学界に蓄積された栄養学、医学、公衆衛生、衛生環境等の分野における科学的知識および技術を、国内および世界的に共通な課題の解決に活用し、SDGs に基づいた社会貢献を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ SUN Business Network Japan (仮称: SBNJ) 事務局機能誘致に向けた活動継続。</li> <li>➤ SDGs 貢献プラットフォームの形成。</li> </ul>	➤ 進捗なし		
<b>研究会・部会・委員会・分科会</b>	<b>活動ビジョン・ゴール</b>	<b>年度目標</b>	<b>進捗・課題</b>	<b>予定・行動計画</b>	<b>関連団体等</b>
国際協力委員会	アジアの ILSI 各支部間の交流による食品法規動向及びリスク評価等の情報収集・共有化と ILSI Japan 関係者への成果報告	9 月 19~20 日開催 予定の Asia Life Sciences Institutes Network (ALSIN) 会議(アジア地域 ILSI 支部との情報交換会)への参加、情報交換	<p>&lt;進捗&gt;</p> <p>11/1 部会長会議にて、今期の活動状況を報告</p> <p>11/5 国際協力委員会開催、活動の振り返りと来期の目標について提案、了承を得た。</p> <p>「イルシー」誌への投稿は初校の確認まで終了している。</p> <p>&lt;課題&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の継続性</li> <li>・次々回 ALSIN 会議日本開催の可能性</li> </ul>	<p>&lt;予定&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年明けに会議を開催し、当期の活動について相談する。</li> </ul> <p>&lt;行動計画&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2024 年 ALSIN 会議で了承されたコラボの取り組みに関する確認・必要に応じ委員会で分担作業</li> <li>・2025 年 ALSIN 会議への出席に向けた準備</li> </ul>	
食品機能性研究会・AI 栄養・機能性研究部会					

AI デイアトロ フィ 研究部門 分科会	数千分子種よりなる 食品摂取によるヒト の代謝状態を最新の コンピュータ技術と 計算科学を活用し、高 速で安価に食の機能 性・安全性を予測する AI システムを構築す る。	・代謝モデルの領 域拡大 ・機能伝達経路の イジングモデル ・AI 教育	▶ 共同研究講座第Ⅱ期 ● 第Ⅱ期勉強会について ① 本年度開催日として、 12/17、1/14、3/17 を決定。 ② 第1回勉強会：“量子コンピ ュータ、AlphaFold3、関連デー タベース等の最新動向”をWeb 開 催。	▶ メンバーが具体的に参画で きる勉強会、セミナー開催 を計画する。	東北大学未来科学技術共 同研究センター (NICHe : New Industry Creation Hatchery Center, NICHe) 東北大学大学院農学研究 科
情報委員会・編 集部会	・調査・研究活動と その成果の発表 ・科学情報の普及 ・国内外の関連機関 との交流・連携	1. 活動報告配信 (年4回) 2. 機関誌「イルシ ー」の発行(年 4回) 3. 「栄養学レビュ ー」誌の発刊 (年4回)(女 子栄養学出版 部との共同事 業) 4. 種々出版物発刊 のコーディネ ーター 5. ホームページ 改定	1. 活動報告 ・2024年9、10月分配信(11月)。 2. 「イルシー」 ・160号：発行、ホームページ掲載、 お知らせメール配信(11/15) ・161号：編集中(2025年2月発行 予定) 3. 「栄養学レビュー」誌 ・126号(=最終号)：2024年11月 20日発行 4. Nutrition Reviews 誌を出版するオ ックスフォード大学出版から同誌 のアブストラクトのみを機械翻訳 し発信するプロジェクトに対する ライセンス契約の継続は不可との 連絡を受領。	1. 部会活動報告の配信 (1月、4月、7月、10月) 2. 機関誌「イルシー」の発行 (2月、5月、8月、11月)	

【事務局からのお知らせ】

理事会	第7回理事会開催(12/18 15:00~16:55)
-----	-----------------------------

## 決議事項

### 1. 定款変更

- 理事の代理出席及び同行者出席について質問があり、定款に記載がないため議題とした。現在、書面表決の仕組みがあるとの理由で代理出席及び同行者は認めないと決議された。
- 現在、定款では理事会の構成が理事のみと記載されていること、実際、監事が出席していることを考慮すると定款に監事の出席や表決権の有無及び議題に関係する出席者を認める記載が必要との意見が出て、次回の理事会に案を出すよう指示があった。

### 2. 2024 年収支見込案、2025 年収支予算案

- 2024 年収支見込案は、特に質問なく承認された。
- 2025 年収支予算案について、賃上げの有無、会員勧誘のための方策、CHP テイクテン収支内容、内閣府の SIP（戦略的イノベーション創造プログラム）参加等に質問があった。
- 来年赤字予算を出すのであれば3か年計画を作成し、黒字化の展望を示すよう意見が出た。
- ILSI Japan 会費の値上げの意見が出て、他の団体等の値上げ状況を調べるよう意見が出た。

## 討議・報告事項

### 1. ALSIN 会議のフォロー

- ILSI Focal Point in China の継承組織である Shanghai JS Life Sciences Institute (SJLSI) 及び本部が参加する今年6月に開催される「アジアアレルギー会議」への資金拠出と、参加時に「ALSIN 会議」の名称を出すことへの同意要請があり、資金は出さない、ALSIN 会議の名称利用は問題なしとなった。

### 2. SIP 参加について

- 内閣府が事務局をしている SIP の中の、包摂的コミュニティプラットフォーム構築の D グループ「障がい者、高齢者の生きがい向上策」の中の「デジタル同居サービスの開発」の協力参加機関として、2024 年に ILSI Japan 木村氏がコンサルタントとしてすでに参加している。
- プログラムのターゲットが、働く世代から高齢者のフレイル予防へとシフトしてきており、食品産業の参加の余地ありと見て、参加を継続したい。
- 昨年 11 月に公開シンポジウムが開催され、ILSI Japan の会員企業が 22 社参加していることが判明し、新研究部会の発足につなげればよいと考えている。
- 2025 年参加の詳細は、2 月 5 日の理事会で担当者より再度説明する。

### 3. GR プロジェクトについて

- グリセミック・インデックス (GI) に代わる GR (Glucose Releasing Rate) 法の研究について経過報告をし、課題内容、結論が見えてきたことを説明。終息の方向で桑田理事指導の下、進めている。

### 4. 本部情報

	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 2025年8月開催のパリ国際栄養学会議（ICN）に ILSI が Federation として参加することが決定した。6つのセッションを実施予定。日本はまだ参加を決めていない。</li> <li>● 本部総会は2025年夏にバーチャルで開催を予定、翌26年はリアルで開催する。</li> </ul> <p>5. 2025年4月以降の事務局体制について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 事務局長の出向契約が3月末に終了するため、次期事務局長の指名があった。</li> </ul>
事務局	<p>1. 栄養学レビュー誌の編集業務を担当された箸本弘一氏、バイオテクノロジー部会を担当された在田典弘氏が12月末に退職された。</p> <p>2. ILSI 本部関係</p> <p>1) グローバル理事会、グローバルアセンブリー会議（12/5, 18）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① The ILSI Federation at ICN 2025 2025年8月にパリで開催のICNにILSIとして、ブース並びに6つのセッションを提案。</li> <li>② The 2030 ILSI Annual Report 5年毎の報告書の中味（サイエンス、他団体との違い、予算等）について議論。</li> <li>③ Nomination Review/ILSI Global Board of Trustees, Global Assembly アジア地域は、変更なし。</li> <li>④ Global Finance Discussion 支部拠出金は、現在約US\$12万、2018年当時US\$71万から、かなり減少。</li> <li>⑤ 2025 Global Annual Meeting (virtual) ILSI U.S. &amp; Canada 年会（4月開催）との兼ね合いで2025夏に開催する。</li> </ul> <p>2) Take10!®の商標対応（11/17, 20, 12/25）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 本商標について、ILSI 研究財団後継のAFSIへの権利者表示変更を完了。</li> <li>② AFSIに連絡すると同時に次の段階として本商標をILSI Japanへ移譲を要請（11/20）。 移譲登録文書を先方に送付し、該当部分への署名を要請（12/25）</li> </ul>